

# 新たな伝統に向けて

校長 根岸 秀行

例年より少し遅咲きの桜とともに 70 人の新入生を迎え入れて、本校の新年度が本格的にスタートしました。これからどのようなドキドキ、ワクワクが生まれるのか、楽しみです。学校という場所は、先生が教えるだけの場所ではありません。子供どうしが、上級生、下級生、そしてもちろん同級生どうしがよいところを示しあう場所でもあります。お互いに見習いあって、本校玄関にある標語のとおり「よく考えて判断し行動する子供」としてさらに素敵な学校に高めてほしいと願っています。



さて、今年はこの附属小学校が誕生して百四十年になります。西南戦争があった明治 10 (1877) 年 12 月、本校は、師範学校(現富山大学人間発達科学部)学生の教育実習と小学児童教育のために誕生しました。ただし、当時の名称は「石川県第二師範学校附属小学校」。意外かもしれませんが、富山県は石川県の一部だったのです。その後、明治 16 年に富山県として独立する頃、本校はすでに授業法の研究学校として、富山県下の小学校のモデル学校となっていました。その後の大正デモクラシー期には、中田栄太郎主事(現在の校長)を中心に、自由主義的で児童中心的な教育の拠点となっていました(『富山大学 50 年史』2000 年)。この実習校であって研究校でもあるという特徴は、今に残ります。受け継ぐべき価値のある、良き「伝統」です。

「伝統」とは、長い年月をかけてだんだんと形作られるものとは限りません。短い期間に何かの変更され、その変更が人々に受け入れられたとき、後から「伝統」と呼ばれることも多いのです。例えば、有名な越中「八尾風(やつおかぜ)の盆(ぼん)」。江戸期からの伝統行事というイメージがあるでしょうが、あの優雅な踊りの所作や音楽、そして行事の仕組みは、じつは江戸期の姿ではありません。今から 100 年ほど前、大正から昭和にかかる 20 年ばかりの間に、当時の八尾町を揺り動かしていた社会変動への対応策として、八尾町の有志が多くを改変した結果でした。この変更が多くの人々に受け入れられ、その結果、「新たな伝統」となったのです。

日本はここ 30 年ばかり、経済と社会の様々なシステムが変わりはじめており、その方向はまだはっきりしません。つまり現在は、「新たな伝統」が生まれやすい環境にあります。これは、学校教育についても同様です。子供の数も、親の対応も、先生の養成のあり方も、教育そのものに対する政府や企業のスタンスも大きく変わってきました。こうした変動に対応して、私ども附属小学校も何らかの対応を求められることになります。こうした対応が、後の人々に「新たな伝統」として受け入れられる素晴らしいものとなることを願っています。